青陵

第１１２号
北海道教育大学
青　陵　会
（北海道教育大学岩見沢校同窓会）
会長　早　瀬　公　平
印刷 北海道社会福祉事業団福祉村
（TEL 0126-４５-２３００）

〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉

もくじ

○巻頭言……１　○総会報告・周年行事について…２～３　○令和５年度役員…３
○研修活動報告…４　○恩師と学生のこの頃～５　○各学科の活動状況…６～７
○新青陵会員の抱負…８　○退職支部長からのメッセージ…９～12　○先輩を訪ねて…12
○学生活動支援事業・編集後記…13

「多くの困難を乗り越えて　創立一〇〇周年を祝う」

北海道教育大学青陵会　会長　早　瀬　公　平

今年は、新型コロナ禍により三年間中止が続いた総会を四年ぶりに開催することができ、心から嬉しく思います。議事進行も円滑に行われ、無事終了しましたことに、遠方より参加して下さった各支部代表の皆様に深く感謝を申し上げます。

本年は、青陵会創立一〇〇周年を迎える記念すべき年です。一〇〇年前の大正十二年に実業補習学校教員養成所として開校した母校は、時代の変化に対応しながら本道教育の発展に大きく貢献してきました。

その歴史を支えてきたのは、何よりも、卒業生である青陵会の会員の皆様です。本道教育界はもとより、各地で活躍されている諸先輩をはじめ会員の皆様のご功績に敬意と感謝を申し上げます。

私たちは、「岩見沢校の卒業生全てが青陵会の会員である」という考え方のもと、「会員相互の親睦と資質の向上を目指す」ことを会是として、母校の発展と、本道教育の振興に寄与することを目的として活動を進めてまいりました。

特に近年は教員採用数の減少や新型コロナウイルス感染症の影響など、さまざまな困難に直面しながらも、各支部や関係機関との連携を図りながら、広報活動、学生活動支援事業などを実施してきました。

また、「同窓会今後のあり方検討委員会」を設置し、組織改善や財政基盤の強化などについて議論を重ねてきました。

当初の計画では、改革の具体案を今総会でお示しをして承認をいただいた後、およそ来年度を目途に全面実施の予定でいましたが、まだ若干の議論が不足していることや、この秋に開催される一〇〇周年記念事業の準備に集中することを優先して、今回の提案を見送ることといたしました。

まずは一〇〇周年記念事業を成功させて、その後、同窓会改革に鋭意取組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

この度の記念事業の推進については、大学、同窓会、後援会の三者により実行委員会を組織して、実行委員長の山本教授（キャンパス長）が発案の「地域とともにあゆみ、ともにつくる　～往古来今～」をスローガンに準備を進めています。

特に、記念式典は大学の先生方や職員の皆様、祝賀会は青陵会が、というように役割分担をしたことは、これまでにない画期的なことです。

また、学生諸君がロゴマークや記念賛歌等の作成、記念の演奏会や作品展など、様々な場面での協力と参加により、華を添えて下さいます。

さらに、岩見沢市開庁一四〇年、市制施行八〇年を迎えるという、トリプルに祝賀が重なり、岩見沢市も加わって、九月二十三日を中心に記念行事が開催されることになりました。

私は、これまでに、青陵会創立七〇・八〇・九〇周年の祝賀行事に参加した記憶がありますが、大学はもとより、岩見沢市も加わるという、これまでとは趣向を異にする記念行事になると予想され、大変楽しみにしています。

「往古来今」とは、綿々と続く時間の流れ、また、昔から今まで。「往古」とは過ぎ去った昔、「来今」とは今から後のことを言い、一〇〇年の歩みをもとにこれからも益々発展していこうという願いが込められているようです。

令和五年度　北海道教育大学青陵会総会報告

「創立一〇〇周年の節目の年を迎えて」

北海道教育大学青陵会理事長　藤　田　祐　二

一　はじめに

昨年度に引き続き理事長を務めさていただきます藤田祐二と申します。本年度も与えられた役割を果たしてまいりたいと考えておりますので、各会員の皆様には、一層のご理解とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

さて、令和五年度総会については、去る五月二十日（土）、岩見沢市のホテルサンプラザで、集合形式で開催することができました。

当日は、二十一支部中、十二支部の出席をいただき、札幌支部の佐藤達也支部長、石狩支部の吉田光岐支部長の進行により議事が進められ、令和四年度会務報告、会計決算報告、監査報告、令和五年度活動方針及び会務計画案、会計予算案のすべてが承認されました。また、役員改選については、副会長五名が交代することが承認されました。

以下、総会の概要をお知らせしますので、ご一読ください。

二　令和四年度の反省

①　事務局

ア　「創立一〇〇周年を祝う会実行委員会」を大学と一体となって立ち上げ、記念式典や事業の内容等を検討

イ　「同窓会今後の在り方検討委員会答申」を踏まえた会則の見直しに向け、各支部からの意見を集約

ウ　ホームページの更新による積極的な情報発信

②　総務部

ア　退職会員の意識の変容に向けた啓発

イ　大学の卒業式・入学式における祝文の送付及び同窓会入会に向けた働きかけの強化

③　研修部

ア　総会と研究大会の同時開催（新型コロナにより中止）

イ　研修誌「望岳final」の頒布

④　会員・組織部

ア　期別同窓会員名簿の作成に係る方針の確定及び各支部との連携によるデータの集約

⑤　広報・情報発信部

ア　会報「道青陵」一一〇号、一一一号の発行

イ　ホームページの改善と充実

⑥　大学連携部

ア　学生活動支援事業の推進

イ　学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会入会促進

以上が令和四年度の主な取組です。

三　令和五年度の活動計画

①　事務局

ア　「創立一〇〇周年を祝う会実行委員会」を中心とした記念行事・事業の実施

イ　「同窓会今後の在り方検討委員会答申」を踏まえた会則の見直しに向けた取組の加速

ウ　ホームページでの積極的な情報発信

②　総務部

ア　退職された会員への会報の送付

イ　大学の卒業式・入学式における祝文の送付及び同窓会入会に向けた働きかけの強化

③　研修部

ア　研修誌「望岳final」の継続頒布

イ　専門的教育職員育成のための特別研修会の実施

④　会員・組織部

ア　期別同窓会員名簿の作成

イ　組織実態調査の検討

⑤　広報・情報発信部

ア　会報「道青陵」一一二号の発行

イ　ホームページの充実

⑥　大学連携部

ア　学生活動支援事業の継続

イ　学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会入会促進

⑦　会計

ア　会費納入の働きかけ

イ　経費節減の推進

以上が令和五年度の活動計画です。

新型コロナウイルス感染症が、五月八日をもって二類感染症から五類感染症に移行されたこと、新型コロナの感染状況が心配されるような状況ではなかったことなどを踏まえ、四年ぶりに現地開催としたところで

す。何かとお忙しい中、足をお運びくださいましたことに、改めて感謝を申し上げます。

総会後に実施しました教育懇談会では、岩見沢市長の松野哲様、岩見沢校キャンパス長の山本理人様をはじめ、たくさんのご来賓の皆様にご出席をいただきました。本年は、大学及び同窓会の創立一〇〇周年に加え、岩見沢市の開庁一四〇年を迎える節目の年となります。岩見沢市と共に歴史を刻み、市民に親しまれてきた大学として、また、市の教育づくりに関わらせていただいてきた同窓会として、今後も相互の連携・協力に一層努めていくことを確認する機会となったことをお伝えし、総会の報告とさせていただきます。

教育懇談会の様子

令和５年度　北海道教育大学青陵会　支部長・事務局長一覧

支部名	支部長	事務局長
札幌	佐藤達也	関　敏明
石狩	吉田光岐	澁谷　拓
後志	豊田一正	佐々木　淳
小樽	加藤俊明	本間浩平
上川	石塚　睦	鈴木一朗
宗谷	畑　慎司	嶋崎健一
留萌	金山茂樹	豊崎東洋
檜山	草間留美子	草間・留美子
渡島	浅野友善	浅野友善
空知	高岸春二	中嶋利啓
胆振	大熊龍也	北野雄介
日高	品田和輝	玉手広昭
帯広・十勝	阿部英一	出村　聖
釧路	志藤英樹	志藤英樹
根室	滝　泰英	滝　泰英
オホーツク	岩瀬知範	水野利幸
関東	岡山　武	御法川慎司
高特大	山下秀樹	宮崎純也
指導主事	因　雅仁	新栄　裕
社教主事	斎藤佳太	舛田暁史
公務員・民間	松浦靖高	佐藤直輝

令和５年度　北海道教育大学青陵会役員

名誉顧問
葛西　明
笠井瑞昭
藤原光成
今井信義
大森啓司

顧問
佐藤惠三
根津　孝
我孫子章平

参与
荒川　巌
高島康範
高木勇一
東志　昇

会長
早瀬公平

副会長
綱渕秀幸
近田勝信
松浦靖高
高岸春二（空知）
星野誠一（札幌）
渡邉琢磨（石狩）
豊田一正（一区）
本間正彦（二区）
浅野友善（三区）
大熊龍也（四区）
小田良秀（五区）
山下秀樹（高特大）
竹見　純（指導・社教）

理事長
藤田祐二（岩・光陵中）

副理事長
松野岳彦（岩・明成中）
米倉卓司（三・岡山小）

会計
尾見秀樹（岩・美園小）
野村知史（岩・東小）

総務部長
米倉卓司（三・岡山小）

副部長
三好考央（雨竜小）
小林　広（岩・中央小）
後藤淳志（由仁小）

研修部長
小熊孝一（浦臼中）

副部長
三浦新一郎（芦別小）
渡邉　現（砂川小）
杉島亜紀（南幌小）

会員組織部長
疋田博和（赤平小）

副部長
八柳　圭（美・東小）
箕田　裕（岩・第一小）
長崎卓也（芦別小）

広報情報部長
林　宏和（上砂川中）

副部長
神島亘基（砂・豊沼小）
渋谷憲一（妹背牛小）
一ノ瀬健太郎（三・岡山小）
小野寺英樹（滝・江陵中）
沢　泰宏（岩・第一小）
笠井賢吾（千歳・緑小）

大学連携部長
江幡佳代（三・菅野中）

副部長
五十嵐吏加（岩・南小）
三國　均（岩・光陵中）
小林大助（岩・東小）

監査
谷本慎司（一区）
品田和輝（四区）
成田秀彦（空知）

令和四年度研修活動報告と令和五年度研修活動の展望

北海道教育大学青陵会　研修部長　小熊孝一

○令和四年度研修活動報告

令和四年度、研修部においては、全道各支部との連携を重視し、同窓のつながりを大切に取組を進めてまいりました。総会においてもご報告させていただきましたが、改めて紙面にて報告いたします。主な推進事項は、次の四点になります。

（一）「会員研修会（Ｓセミナー）」については、研修実施内容を検討し、新型コロナの状況等から、次年度の取組への準備期間として取組を進めました。

（二）各支部と連携を図り、学校管理職研修など、研修内容の工夫改善を図りました。

（三）専門的教育職員候補者の育成に向けた、部内研修に努めました。

（四）情報提供や研修資料の提供など、各支部と連携協力し、研修の充実を図りました。

（一）については、昨年度に引き続き開催を模索いたしましたが、一〇〇周年記念事業の実施に向けた実行委員会が六月に開催され、協議された内容等から、会員研修ともなるであろうことが構想されたことから、令和五年度実施に向けた準備期間とすることといたしました。

（二）と（四）については、取組の重点として、問い合わせ等あった場合には、迅速に協議し、できる対応をして参りました。管理職研修に資する想定論題の情報提供や取組の視点などを示させていただきました。また、研修誌「望岳final」の頒布も支部の要請に応じて行って参りました。

（三）については、対象となる人材をあげることはできませんでしたが、今後も各支部、会員個々との情報連携の強化に努めて参ります。

いずれにしても、令和四年度においては、新型コロナの影響を受けた形となったこと、また一〇〇周年記念事業実施に向けた準備の取組期間となった形となり、現下の状況を踏まえて、引き続き活動を模索する一年であったと言えます。

○令和五年度研修活動の展望

まずは、五月の総会にて本研修部の令和五年度業務計画につきまして、ご承認いただき、ありがとうございました。以下、総会議案に掲載いたしました計画に基づき、令和五年度の研修活動の展望をして参ります。

北海道教育大学青陵会の活動方針に基づき、研修活動の充実に資する次の四点の取組を推進して参ります。

（一）一〇〇周年記念事業での取組を通して、会員研修の充実に努める。

（二）学校管理職研修など、研修内容の工夫改善を図る。

（三）専門的教育職員受検者及び候補者の育成・研修に努める。

（四）情報提供や研修資料の提供など、各支部との連携に努める。

いよいよ令和五年度は、北海道教育大学と北海道教育大学青陵会にとって記念すべき一〇〇周年の年となります。研修部としては、本事業において「事業部」担当となっていることもあり、この事業展開の充実に向けた取組に重点をおき、年一回の会員研修（Ｓセミナー）もこれに呼応する形で実施したいと考えております。

そういう意味で九月二十三日は周年記念の事業日であり、わたしたち会員の研修の場でもあるという形で行い、会員皆様の母校への想いを新たにし、明日からの取組への充実を図るものとしていきたいと考えております。これが研修部として、一番の重点事項と押さえております。

現時点での事業部での取組の一つとして、総会でご紹介したロゴが学生の協力の下できあがり、各種の配布物等に掲載していくことを予定しております。このほか既に取り組みつつあるもので、

①ＯＢ・ＯＧ・在学生の活躍や活動の映像を、様々な機会に流す。八人の方々にインタビューする形で、事業部の大学の先生方、卒業生の方々のご尽力等により、鋭意制作しているところです。この映像には映像のつなぎとしてのイメージソングも制作し、我が母校のＰＲとして、参加された皆様にも当日、記念式典や祝賀会などでご観覧いただくこととなっております。

②式典で吹奏楽の演奏を行う。一〇〇周年というお祝いの機運醸成として、大学の学生さん方による吹奏楽の演奏も予定しております。

今年度も研修部としては、引き続き全道各支部との連携に努め、会員の研修活動の充実に資する取組を進めてまいりたいと考えております。講師派遣や資料提供等のご依頼があれば、全道どこにでも参りますので、お声かけいただければと思います。

教員会員の減少が見られ、公務員・民間の卒業生が増えつつある状況ではありますが、次なる策を構想しながら、研修の内容、在り方も見つめていきたいと考えております。

恩師と学生のこの頃

「眩いばかりの卒業生」

芸術・スポーツビジネス
専攻教授
宇田川　耕一

長谷川彩さんはまさに、私の理想とする卒業生像を体現している存在です。

私は二十八年間の毎日新聞社での企業人生活を経て、十年前に大学教員へ転身した実務家教員です。勤務の傍ら進めてきた、今年で二十二年になる研究者としてのキャリアを、企業人体験と共に経験した私が目指すべき大学教育とは何か。それは、学生に正解のない問いを問い続ける四年間を提供することです。

なぜなら、実社会では解答は一つとは限らず、無数の選択肢の中から、その時の「自分なりの」の最適解を探す、絶え間ない営みが要求されるからです。そのためには、教員から一方的に習う「学習・座学」から、自ら課題をみつけて考え抜いた上で取り組む「研究・実践」への進化を促すことが重要です。

よく、私は運転免許に例えて、「学科試験で満点を取っても車は一ミリも動かせない。仮免許を取って路上実習をして初めて、使える運転技術が身につく」と説明します。

さまざまなプロジェクトを座学ではなく、実際に現場で「企画から終結（フィナーレ）まで」経験するということ。それが、卒業後に自分でハンドルを握りしめて、人生の長い道のりを、思いっきり自由に走り回るためのステップアップにつながると信じています。

私は前職の毎日新聞社で広告事業本部というセクションに長く所属していました。広告営業職としては、奇しくも長谷川さんの先輩とも言えます。一方で新聞社時代に、芸術やスポーツのイベントに携わる、企業や団体の担当者の多くが、その部署に所属になってから初めて、仕事を通して独学でノウハウを身につけていることを知りました。

思えばその頃から、大学にもそれに対応する学部や学科があれば良いのにと漠然と感じてはおりました。

私の研究室では、学生主体によるイベントの企画から実践までを、活動の中心にしています。これは、かなり難易度の高いミッションなのですが、長谷川さんの代は自由な発想で見事にクリアしてゆきました。

そして、昨年、後輩からの熱烈なリクエストに応え、職場での体験を惜しげもなく披露してくれた長谷川さんの社会人としての晴れ姿は、私にはとても眩く、誇らしいものでした。

「自由なアイデアを自信に」

会社員
長谷川　彩

私は幼少期から様々なことに興味を持ち、ピアノや水泳、スキー等の習い事をやっていたこともあり、好奇心旺盛な性格に育ちました。今考えると、芸術・スポーツビジネス専攻に入った理由はそこと繋がっていたのかもしれません。私の代で二期生でしたが、教育プログラムも今までにないもので、他の大学では経験できないことが多くありました。

専攻講義では「発想力」や「ビジネストレンド」「地域活性化」というものがありました。具体的には、自身のアイデア・感性を大事にして、発想力を養う講義や、地域活性のために学生のみで実際にイベントを開催する講義です。また、芸術鑑賞やスポーツ観戦を通して、"良かった点・改善点"をまとめる講義もあり、物事に対して常に客観的な視点を持つ癖が付いたと感じています。

私が宇田川先生の研究室に入ったのは、今までの講義で宇田川先生が学生の自由な発想を大事にしてくださる先生だと感じたからでした。研究室の講義でも、学生のみでイベントを発案して実行まで移すものがありました。宇田川先生は学生の発想を一切否定することなく、どんな時も学生の味方でいてくださったのを今でも印象深く残っています。

学生が生き生きと自分のアイデアを活かせるように、そしてそれを楽しめるようにしてくださったのだと思います。宇田川先生の言葉は、いつも学生を前向きにさせる、温かく包み込むような言葉でした。そのような先生のもとで日々過ごせたことで、社会人になっても自身でアイデアを生むことや、考えを形にすることに臆せず、前に進めたのではと思います。

私は今、広告営業をしています。営業では、現状を把握することや、その中から課題を想定することが重要となります。学生時代に養ってきた、物事の良かった点・改善点をまとめる考え方は、現状把握や課題想定に役立つ形となりました。

そして、宇田川先生が私たちのアイデアを大事にしてくださったことを思い出しながら、自らのアイデアを自信に変えて日々頑張っています。物事を柔軟に捉え、変化を受け入れていく姿勢は、学生時代に受け入れてくれた宇田川先生のおかげだと思っています。

何年経ってもその姿勢を忘れず、社会人として周りから尊敬される存在になりたいと思います。

各学科の活動状況

「実践的な学びの場と授業での創意・工夫」

芸術・スポーツビジネス専攻
宇田川　耕　一

芸術・スポーツビジネス専攻では、芸術やスポーツに関連する様々な組織やイベント等の運営について学びます。授業ではグループ活動やプレゼンテーションなど、あくまでも学生が主体による実践的な学びの場が提供されています。

例えば、私が担当する二年生の専門科目である「芸術経営学」では、そうした視点を意識し、ＷＢＣ（ワールド・ベースボール・クラシック）日本代表の栗山英樹監督が選手に発した言葉などを題材に、スポーツの監督やオーケストラの指揮者ら指導者の役割などについてグループ・ディスカッションするなど、常に最新の事例を取り上げております。

さて、私が教員として日々接している学生たちは、いわゆるＺ世代で生粋のデジタルネイティブ世代です。生まれた時から高速インターネット、スマートフォン、ビデオ・オン・デマンド（ＶＯＤ）、各種ゲーム機器、そしてＳＮＳが当たり前のように存在していたので、九〇分間テキストとホワイトボードで一方通行の授業をしても、まったく伝わらないという現実があります。そこで、パワーポイントを基本ツールとして用いながらも、映像も適宜取り入れて、視覚・聴覚に訴える授業をしています。

授業で扱う素材も、歴史的な経営学者や経営者だけではなく、より身近な経営者、例えば孫正義氏（ソフトバンクグループ株式会社創業者、代表取締役会長兼社長）等、実生活で学生が密接に接している企業のケーススタディを豊富に取り入れ、飽きさせない工夫を欠かさないように心がけています。

カリキュラムについてご紹介します。一年目では「経営学概論」や「マーケティング概論」など、四年間の学びの土台となるリテラシーを身につけ、二年目では芸術系とスポーツ系併せて七つの研究室に仮配属され、各教員の専門領域を深く掘り下げます。三年生では実際の企業の業務を体験する「インターンシップ」や国内外のビジネスへの理解を深めるための研修旅行である「ビジネストレンド」により、本格的にビジネスを学びます。四年目ではこれまでの経験を基に、芸術・スポーツの視点から多種多様な卒業研究を行います。

卒業生は金融機関や地方自治体職員など多彩な分野で、地域活性化等の様々な課題に携わっております。

「専攻紹介」

音楽文化専攻
服部麻実

音楽文化専攻には声楽コース、鍵盤楽器コース、作曲コース、管弦打楽器コース、音楽教育・音楽文化コースの五つのコースがあり、現在一学年から四学年まで一七〇名程度が在籍しております。それぞれのコースには二～四の研究室があり、学生はそれぞれの研究室に所属して活動しています。

授業は実技系の授業では個人レッスンの演習を基本に、必修の授業として合奏、合唱、また専門の授業として室内楽、ピアノアンサンブル、舞台表現演習などの他、理論系の授業として音楽理論、ソルフェージュなどが開講されています。音楽教育・音楽文化コースは、主に教員を目指す、また音楽を文化面から学ぶなど、多様な音楽のアプローチを習得します。

専攻主催の演奏会としてはソロ選抜演奏会、室内楽選抜演奏会、卒業演奏会などを開催し、日々の勉強の成果を地域の皆様に発表できる機会としています。

中でも学生主催である定期演奏会は大学が芸術・スポーツの教育課程が集約された時から、岩見沢市市民会館まなみーる大ホールで公演を行い、毎回多くの方にご来場頂いております。吹奏楽、オーケストラ、合唱、室内楽と一年間の集大成の発表の機会となっております。学生と教員が一丸となって、演奏会の成功のために全力で取り組んでおります。本学が地域連携としての役割もある中で、岩見沢市民の方々の協力を得ながら、専攻では音楽を通しての地域貢献を行っております。

また地域連携の行事として、これまで「ミュージックキャラバン」を行ってまいりました。昨年度は、「北海道教育大学芸術・スポーツキャラバン」と題し函館市で開催致しました。その中で吹奏楽・オーケストラのコンサートを開催し、専攻の魅力を発信致しました。

その一方で新型コロナ感染症の問題により、数年間、演奏会を十分に行えず、多くの学生が勉強の成果を発表できなかったことは本当に心が痛みました。オンライン配信などを利用して演奏会などを発信してきましたが、やはり音楽の魅力は対面での生の演奏に代わるものはないと思っております。昨年からは殆ど対面での実技レッスン、また演奏会も行えるようになり、地域の皆様とも多くの交流や演奏会を通してご支援を頂き、感謝しております。

「卒業生と在学生の交流が人材育成に」

美術文化専攻
三橋　純　予

アートマネジメント美術研究室は、社会における芸術文化の役割や意義、そして美術や美術教育の新たな可能性について、学生達が体験的に知識や理解を深めていき、自主的な活動を通して、社会と美術文化をつなぐ人材の育成を目的としています。学芸員や教員を目指す学生が入って来ますが、特に美術館学芸員になる卒業生は多く、現在では博物館実習や連携企画などで在学生との交流も頻繁にあります。

具体的な活動としては、美術館などの文化施設との連携活動、地域における現代アートプロジェクトなど、学外との連携活動を授業に導入しています。例えば、フランス在住の川俣正氏は、三笠出身で岩見沢東高校卒の世界的な現代美術家ですが、〈北海道インプログレス〉という道内回遊型プロジェクトを市民や学生達と共に道立近代美術館から立ちあげ、室蘭市民美術館で紹介展開催後に、三笠の旧美園小学校体育館に〈かつての炭鉱町を現代アートでよみがえらせる〉大規模なプロジェクトを数年がかりで制作しました。

岩見沢市内でも旧競馬場跡にて制作活動を行い、コロナ禍で活動できない時期もありましたが、十年以上の長期プロジェクトになっています。本学から参加した学生は二百名を越えますが、この時に参加した学生が後に美術館学芸員となって、芸術の森美術館企画として、釧路美術館や函館美術館等の道立美術館への巡回展で、北海道のアートプロジェクトとして紹介してくれました。

また、二〇一六年頃からは、岩見沢市福祉課と連携して、アール・ブリュット（障害者の芸術活動支援）を継続的に行っています。北海道アール・ブリュットネットワーク協議会や、市内の福祉事業所とも密接に連携しながら、創作活動の場をつくることや、展覧会の開催協力を続けています。

コロナ以前には、アール・ブリュット国際フォーラム、国際的なアール・ブリュット展覧会、パラリンピックに合わせた文化庁事業〈日本博〉の全国巡回展なども、北海道では岩見沢市が開催地になっており、私の担当する授業などに導入し積極的に協力しました。現在は「アートアカデミー（障害者の卒業後の学びを保障する文科省事業）」に取り組み、今年で三年目になります。福祉課の担当者は岩見沢校出身者で、後輩にあたるゼミ生と一緒にプログラムを企画実施してくれています。

これらのように卒業生と在学生の交流が人材育成の良い環境となっており、今後も大切にしていきたいと考えています。

「地域とともに歩むスポーツ活動」

スポーツ文化専攻
志手典之

平成二十六年四月にスポーツ分野は、前身であるスポーツ教育課程をリニューアルし、スポーツ文化専攻になりました。スポーツ教育課程のスピリッツを受け継ぎながら、ブラッシュアップを重ね、ユニークなカリキュラムの下、学生教育を実施し、地域密着型の連携・貢献事業を展開しています。本専攻は、スポーツ・コーチング科学コースとアウトドア・ライフコースの二つのコースから構成され、スポーツの特性を科学的に理解し、地域の人びとの暮らしを豊かにする指導者を養成することを目標とし、現在、十六名の教員で専攻における学生教育および管理・運営をしています。

スポーツ・コーチング科学コースは、地域におけるスポーツ活動の振興、北海道特有のスポーツ活動や障がい者を対象としたスポーツ活動の促進、幅広い年齢層を対象とした健康の増進活動を実践するために、科学的理論に基づいたスポーツ・健康指導の能力を身につけ、様々な視点から社会に貢献できる学生を育成しています。ヒトとからだの仕組み、健康と体力、スポーツの心理、スポーツスキル向上のメカニズム、トレーニングおよびコーチングの理論・方法など、多角的な観点からスポーツ科学を学ぶとともに、各スポーツ種目における技術・戦術の分析法や指導法を習得し、スポーツを通した地域支援プロジェクトの取り組みを実践しています。

アウトドア・ライフコースは、「北海道がキャンパス」を合い言葉に、広大な北海道の自然環境の中でアウトドア・アクティビティ、自然体験活動、野外教育、環境教育を通じて、人と自然が共生する暮らしの在り方を探究しています。自然の中に飛び出し、様々なアウトドア・アクティビティを通じて、からだ全体で自然を感じ、自然環境の成り立ちと人間が自然環境に及ぼす影響を理解し、地域の人びとの自然に関わって生きていくための知識や文化を学ぶ場を提供しています。また、自然の中での共同生活を通じて、人と自然の関わりに加え、人と人の関わり方も見つめていきます。そして、学生のうちから教える立場に立つ実践的授業を通じて、それまでに学んできたことの理解を更に深め指導力を高めるという学びのステップを用意しています。